

古都・京の記憶に残すべき 戦時の日仏交流 — 関西日仏学館 —

〈 トークと詩の朗読 〉

戊辰戦争の始まりである鳥羽伏見の戦いから冷めやらぬ揺れ動く幕末京都、外国人立ち入り禁止の長い眠りから慌ただしく覚めようとしている。時は1868年（慶応4）3月、舞台は京都御所、フランス公使レオン・ロッシュは、じりじりするほど待たされ漸く紫宸殿に招じられた。先帝の急死から即位したばかりの若干16歳、直衣姿の天皇の前にオランダ公使とともに進み出た。これが京都とフランスの交わりの第一歩である。政変混乱のなか、ミヤコにフランスの一粒の種が撒かれ、やがてそのシンボル「関西日仏学館」が誕生。点から線へのタイムトンネルに入ってみませんか。

〈 トーク 〉

｜パネリスト｜

加賀美幸子氏 元NHKエグゼクティブアナウンサー（理事待遇）

ジュール・イルマン氏 在京都フランス総領事、
アンステティチュ・フランセ関西 館長

宮本エイ子 『京都ふらんす事始め』著者（当研究所理事）

西成勝好 大阪市大名誉教授（当研究所理事長）

コーディネーター：和田義之 弁護士（当研究所理事）



加賀美幸子氏

2022年

5月15日（日） 午後2時～4時

会場 アンステティチュ・フランセ関西 稲畑ホール

〒606-8301京都市左京区吉田泉殿町8

電車でお越しの方 | 京阪電車「出町柳駅」より徒歩12分
バスでお越しの方 | ・市バス31・65・201・206系統「京大正門前」下車すぐ
・京都バス18系統「東一条」下車すぐ

定員
50名

参加費 | 無料

主催 一般財団法人ロマン・ロラン研究所
共催 アンステティチュ・フランセ関西
協賛 稲畑産業株式会社
後援 在日フランス大使館／アンステティチュ・フランセ日本
在京都フランス総領事館
京都市
京都日仏協会



お問い合わせ先
一般財団法人ロマン・ロラン研究所
FAX: 075-771-3281
E-mail: institut.romain.rolland@gmail.com
URL: <https://institut-romain-rolland.jp>

戦時下、関西日仏学館でフランス人教授オーシュコルヌと主事の宮本正清は突然理由なく拘束された。劣悪な警察署で61日間、拷問と生命の危機に晒され敗戦の日を迎え自由の身となる。苦難の歴史が刻まれたフランスのシンボル関西日仏学館の戦時の混乱を記憶すべきであろう。

宮本正清（関西日仏学館主事（当時）、ロマン・ロラン研究・翻訳者、研究所設立者）の“戦時のつぶやき”詩集『焼き殺されたいとし子らへ』を読む。

朗読：加賀美幸子氏 元NHKエグゼクティブアナウンサー（理事待遇）

朗読の名手として知られる。『読み聞かせる戦争』の選者。日本ペンクラブ編、27篇の詩の一篇が『焼き殺されたいとし子らへ』である。

加賀美氏は1963年NHK入局。「女性手帳」「夜7時のテレビニュース」「バラエティー、テレビファソラシド」大河ドラマ「峠の群像」「風林火山」「ラジオ深夜便」「列島縦断 短歌・俳句スペシャル」など報道、教育、教養、情報その他多くの番組を担当。現在も「古典講読」「漢詩を読む」「悩み相談・波護寺」「ドキュメンタリー」などを担当。「古典講読」は『万葉集』『源氏物語』『枕草子』『平家物語』『徒然草』『奥の細道』など、長年にわたって原文朗読を続けている。著書『こころを動かす言葉』『言葉の心・言葉の力』ほか。高校・中学の国語教科書にエッセイが取りあげられている。NHK会長賞、ダイヤモンドレディー賞、前島(密)賞、徳川夢声市民賞など受賞。「千葉市男女共同参画センター名誉館長」「NPO日本朗読文化協会朗読名誉会長」「放送人の会」理事「公益財団法人長寿科学振興財団」理事「日本文藝家協会会員」「NHK文化センター」講師ほか。

追悼 宮本正清 『生命の歌』 抜粋

尾埜善司

早稲田大学を出て京都に移り日仏文化協会、関西日仏学館の設立に参画、昭和2年フランス国公務員たる学館長に仕える主事兼教授として苦勞多い勤めが始まった。『魅せられたる魂』完結の二年前、昭和6年からその翻訳にかかり昭和15年に完成、岩波文庫から3年にわたり刊行された。第一次大戦前後の転換期からファシズムの荒狂う時代を独歩し生き切る女性の真の姿を画いたこの小説の第6、7巻は検閲により存分にカットされた。刊行を貫き通した精神の力は並大抵のことではない。引続く戦争末期「いっそう暗い戦雲のなかで、私は職務のかたわら『コラ・ブルニョン』と『ラマクリシュナの生涯』とを交る交る訳して行った。日に半ページ、1頁づつ。朝夕の祈りのように。…唯一の楽しみであり慰めであり激励であった。」ユーモアに富み、また若くよりタゴールを敬愛していた宮本さんが、あの暗い時期、ラブレエ的な哄笑にあふれた小説『コラ』と、ロランが反ファシズム行動の源泉としたインド思想にわけ入った成果たる『ラマクリシュナ』とを訳しつつづけていた、その姿に感歎する。

しかし、「報い」が来る。昭和20年6月15日宮本さんは理由を告げられることなく警察に連行、拘禁、拷問される。敗戦の翌日釈放されるが、故なく押収された長年にわたる原稿・詩作・日記は焼き捨てられる。彼の誕生日だった。自由は戻ったが、病む妻と幼い三児をかかえた家庭の深手は10年以上いやせなかった。……戦後は大阪市立大学教授をも勤め、25年秋フランス国の招きで渡仏、ロラン文献所で一時研究に没頭、46年には私財を投じ財団法人ロマン・ロラン研究所を設立したが、ロラン新訳・改訳の手は片時も休めなかった。55年秋、3回目

のロラン全集42巻（みすず書房）の刊行が始まり、いま34巻目に達したが、宮本訳の量は8ボ2段組で6,300ページに及んだ。

宮本正清は天成の詩人であった。訳文の力感に満ちたリズムは半ばこのことに由来する。『生命の歌』は焼却を免れた20歳台後半の詩作で、烈々の情熱を秘めて古武士の風格がある。昭和25年、27歳の中田喜直がこの詩集に打たれ「未知の扉」「おもい」など数篇につき独唱曲と合唱曲を作った。詩の静寂・音色・リズムを見事に生かした戦後

の名品であり、10年後に伊藤京子の絶唱を得て作られたレコードに私は感動した。昨年出版された詩集は敗戦前後の作であり、飢餓の獄中をユーモラスに歌った「生ぼとけ」が私は一番好きだ。戦争に抗する情熱の詩句は人の心を打つが、その反戦はイデオロギーによらず、つつましい市民的生活の平安への願いと愛着を源とする。（ちなみに、書名となった『焼き殺されたいとし子らへ』とは、戦争で死んだ若者らの意味ではなく、警察によって焼却された自らの作品——子らの生立ちを詳しく誌した日記・草稿・詩篇のことを指していると思う。）戦後のイタリア映画「陽気なドン・カミロ」を思い出させる宮本さんは、土佐人の情熱と農民の頑丈を備えつつ、優しさと親切さを周りに広げた。子らに優しく、心揺れる妻に優しく、若い男女に優しく、故郷の老人に親切で、宿題をサボった学生を叱らずに心から悲しげな顔をした。ロマン・ロランを敬愛し、広め、苦難の底にユーモアの種火を見出し、耐え抜き、本当の意味での日仏文化交流に貢献した。

一日の生活を
まこと生くる者の上に
光あれ

〔追記〕これは読売新聞大阪本社の依頼により、読売新聞昭和57年12月2日夕刊文化欄に寄稿した一文を同社の了承をえて再録したものである。上記記事は新聞社により表題を「ロマン・ロラン研究で燃焼—宮本正清氏をしのぶ」、大見出しを「烈々古武士の風格—苦難の底にユーモアを見出す」とされ、宮本さんの遺影が掲げられた。

「みすず」1983.3より抜粋 みすず書房

※尾埜善司（1931-2010）（前理事長）京都大学法学部卒業、弁護士、大阪弁護士会会長、大阪国際大学教授、「浜甲子園を守る」住民運動からはじまりテレビ、映画出演など多彩な社会活動。著書『指揮者ケンベ』など。ロマン・ロラン国際平和シンポジウムでユネスコ世界遺産ヴェズレーのマドレーヌ寺院で「焼き殺されたいとし子ら」を朗読。勲三等瑞宝章、仏国パルム・アカデミー・オフィシエ勲章受章。